童話 花さき山

斎藤隆介氏の民話風の語りと
滝平二郎（たきだいら・じろう）氏による
挿絵（切り絵）から、
人間のやさしさや切なさ、強さといったものが
静かに伝わってくる

この民話ふうの物語絵本を読んだ小学生たちは、ひとりのこらず、自分のことよりも人のことを考えてあげる、やさしい心の美しさとたいせつさに、心から感銘を受け、共感しています。

主人公は、山村の貧しい農家に生まれた
「あや」という女の子です。

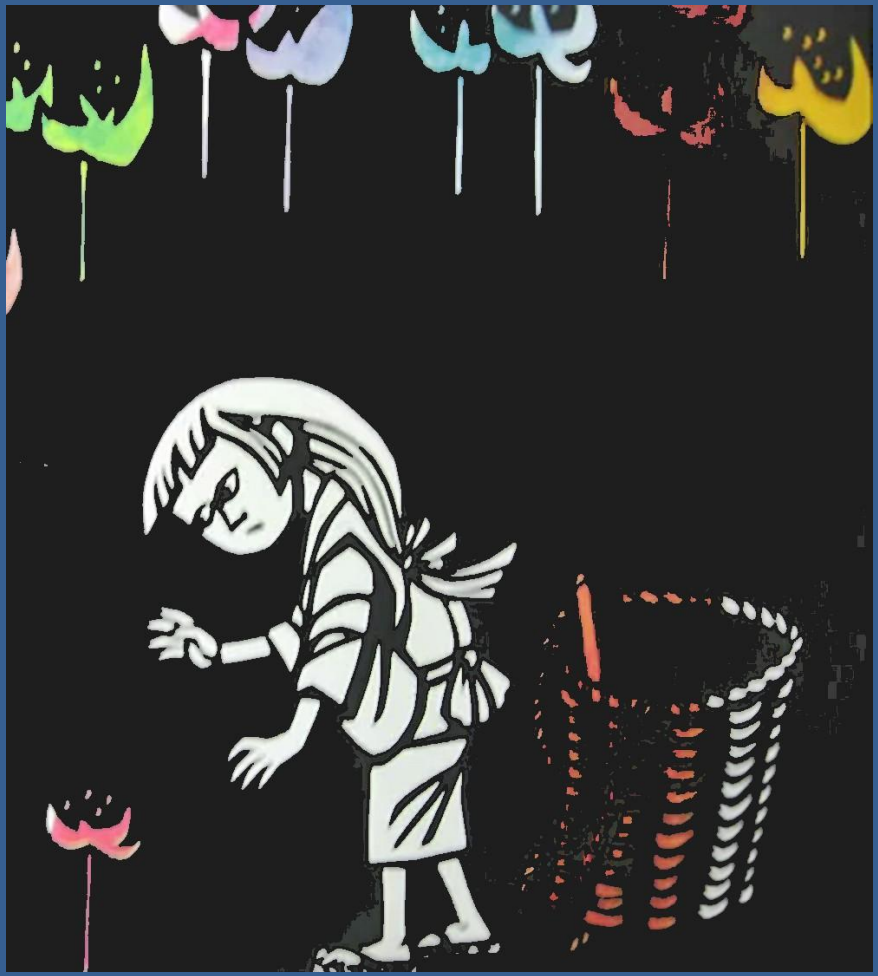
おどろくんでない。
おらはこの山に1人で住んでいるばばだ。
山ンばというものもおる。
山ンばは、悪さをするというものもおるが、それはうそだ。
おらはなんにもしない。

おくびょうなやつが、山ンなかで
しらがのおらをみてかってにあわてる。
そしてはべんとうをわすれたり、あわてて谷さおちたり、
それがみんなおらのせいになる。

あや。おまえはたった１０のおなゴわらしだども、
しっかりもんだから、
おらなんど、おっかなくはねえべ。
ああ、おらは、なんでもしってる。
おまえのなまえも、
お前がなしてこんなおくまでのぼってきたかも。
もうじき祭りで、祭りのごっつぉうの煮しめの山菜を
とりにきたんだべ。
ふき、わらび、みず、ぜんまい。
あいつをあぶらげといっしょに煮るとうめえからなァ。

ところがおまえ、きすぎて、みちにまよって
この山さはいってしまった。
したらば、ここにこんなにいちめんの花。
いままでみたこともねぇ花がさいているので、
ドデンしてるんだべ。
な、あたったべ。
なしてこうしてさくのだか、そのわけを、あや、
おめえはしらねえべ。

それはこうしたわけだしゃ・・・。



この花は、ふもとの村のにんげんが、
やさしいことをひとつするとひとつさく。
あや、お前のあしもとにさいている赤い花、
それはお前がきのうさかせた花だ。

きのう、いもうとのそよが、
「おらサも、みんなのように祭りの赤いべべかってけれ」
とあしをドデバタしてないておっかあをこまらせたとき、
おまえはいったべ、
「おっかあ　おらは、いらねえからそよさ、かってやれ」

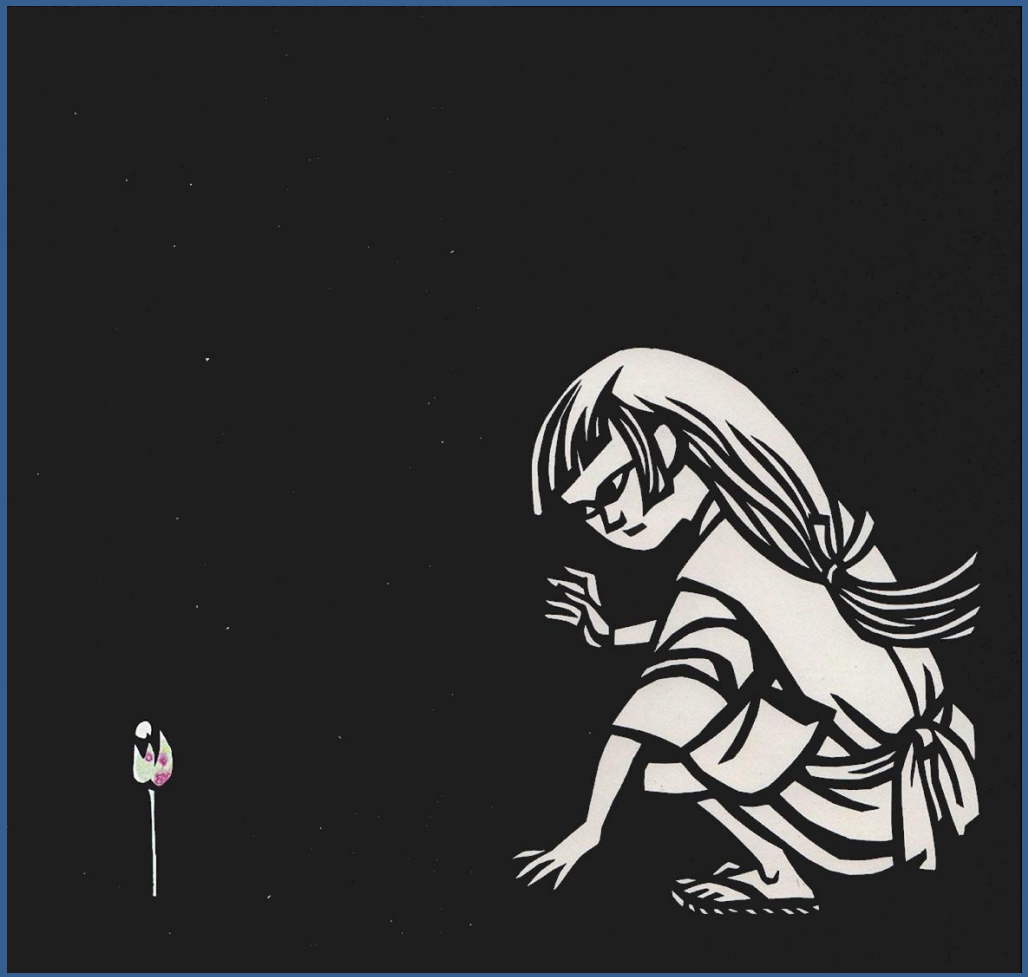
そういったとき、その花がさいた。
おまえはいえがびんぼうで、ふたりに祭り着を
かってもらえねぇことを知ってたから、
じぶんはしんぼうした。

おっかあは、どんなにたすかったか！
そよはどんなによろこんだか！

おまえはせつなかったべ。
だども、この赤い花がさいた。

この赤い花は、どんな祭り着の花もようよりもきれいだべ。

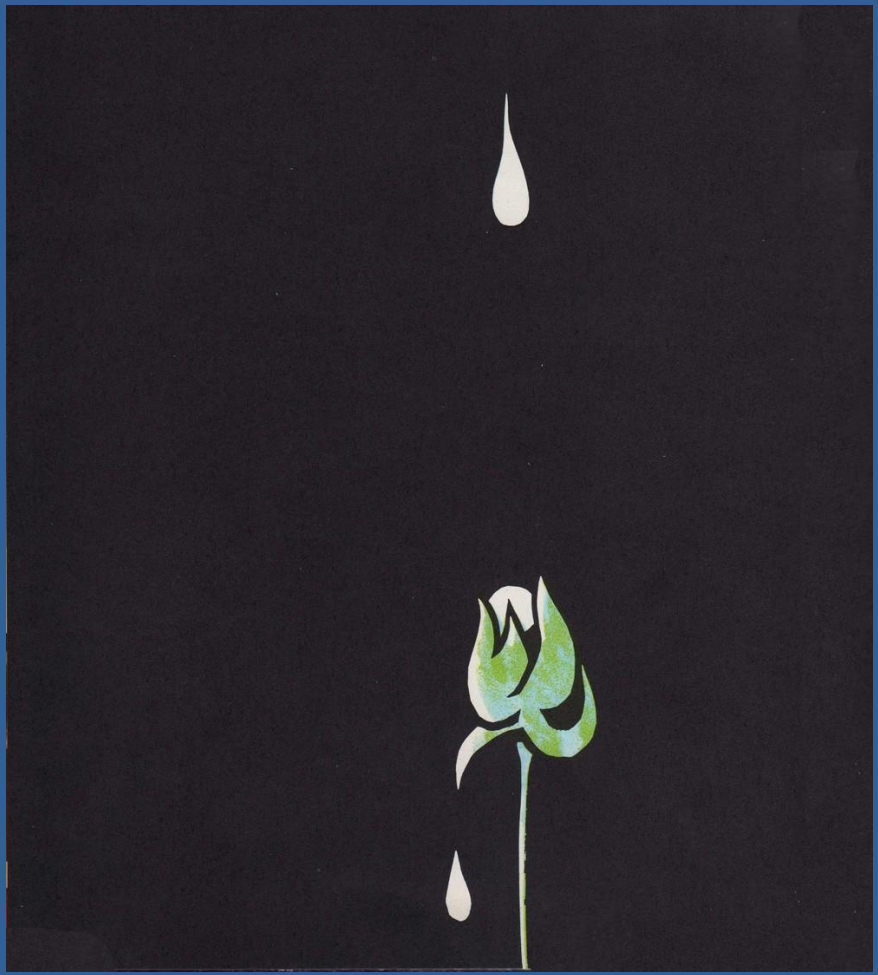
ここの花は、みんなこうして咲く。



ソレそこに、つゆをのせてさきかけてきたちいさい、
青い花があるべ。

それはちっぽけな、ふたごのあかンぼうの
うえの子のほうが、
いまさかせているものだ。

兄弟と言っても、おんなしときのわずかなあとさきで
うまれたものが、じぶんはあんちゃんだとおもって
じっとしんぼうしている。
弟は、おっかあのかたっぽうのおっぱいを
ウクンウクンとのみながら、
もうかたほうのおっぱいもたかっぽうの手で
いじくっていてはなさない。
うえの子はソレをじっとみてあんちゃんだから
しんぼうしている。
目にいっぱいなみだをためて・・・。



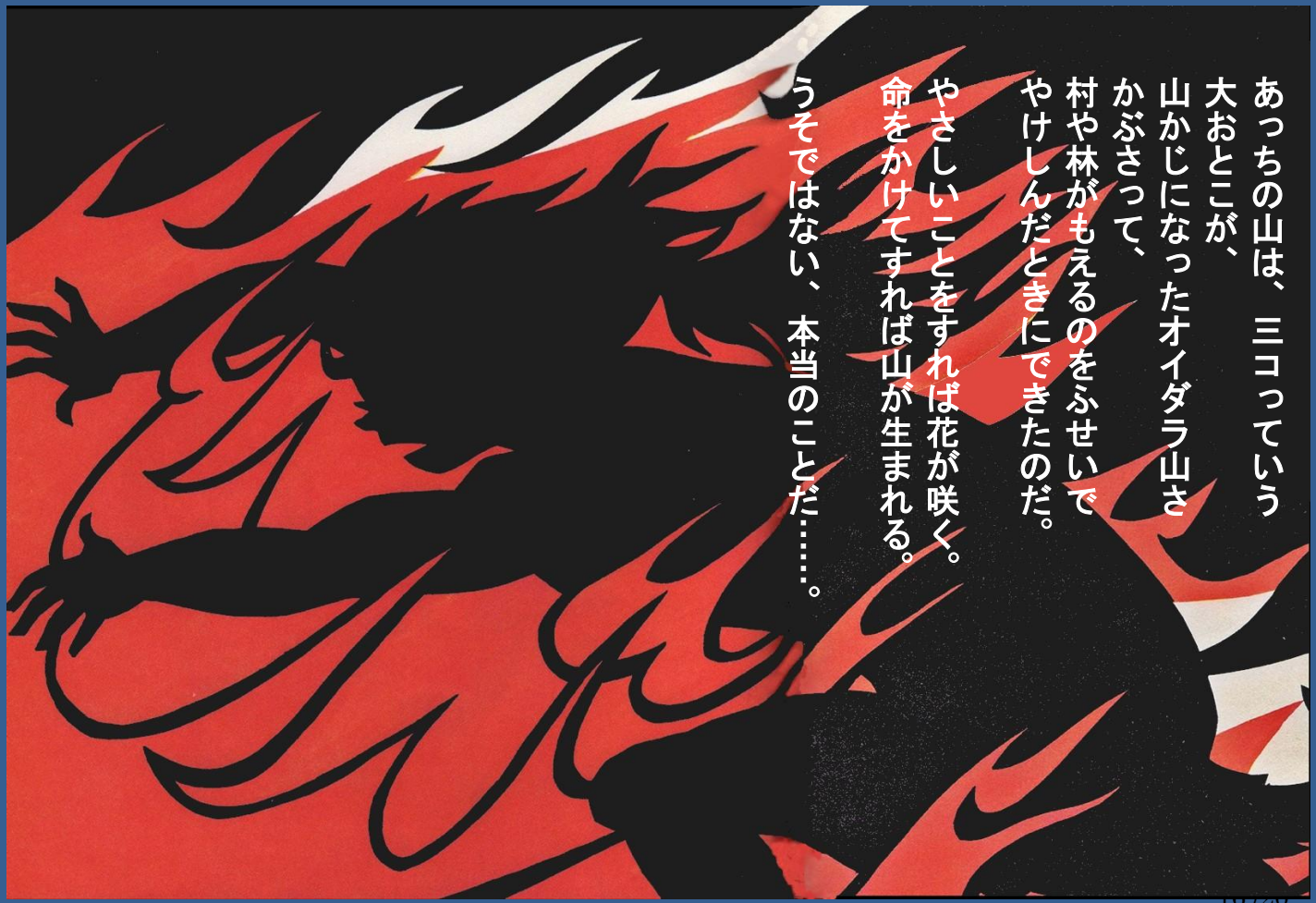
そのなみだがそのつゆだ。

この花さき山一いちめんの花は、
みんなこうしてさいたんだ。

つらいのをしんぼうして、じぶんことより
ひとのことをおもって
なみだをいっぱいためてしんぼうすると、
そのやさしさと、けなげさが、
こうして花になってさきだすのだ。

花ばかりじゃねえ。
この山だって、この向こうのみねつづきの山だって、
ひとりずつのおとこが、いのちをすてて
やさしいことを
したときにうまれたんだ。

この山は八郎っていう山おとこが、
八郎潟にしずんで高波をふせいで
村をまもったときにうまれた。


あっちの山は、三コっていう
大おとこが、
山かじになったオイダラ山さ
かぶさって、
村や林がもえるのをふせいで
やけしんだときにできたのだ。
やさしいことをすれば花が咲く。
命をかけてすれば山が生まれる。
うそではない、本当のことだ……。

あやは、山からかえって、
おとうやおっかあや、
みんなに
山ンばからきいた
このはなしをした。

しかし、だァレもわらって
ほんとうにはしなかった。

「山サいって、
ゆめでもみて
きたんだべ」

「きつねに
ばかされたんでねえか。
そんな山や花は
みたこともねえ」

みんなそういった。

そこであやは、またひとり
山へいってみた。

しかし、こんどは山ンばに
はあわなかった。
あの花もみなかったし、
花さき山も、見つからなかった。

けれどもあやは、
そのあとときどき、
「あっ！いま花咲き山で、
おらの花がさいてるな」って
おもうことがあった。

お　わ　り